

ると、皆同じといふ譯にゆきません。天才的な子があつたら、それを正しく發見して、又特別な指導を考へなければなりません。併し、それは一般の保姆さんでは、中々むづかしいことです。殊に發見がね」

「それでございませうね」

「發見し得ないのも濟まんことですが、一寸ばかり聲がいゝとか、器用だとかいふので、天才扱ひも困りますからね。それが、當節、相當危険なのです。ラヂオ用小音楽家としてなぞね」

「天才の反對に、全く歌へなかつたり、きらひだつたりする子もありませうね」

「ありますね。たゞ、幼稚園としては、出来るだけ或程度迄の教育はしたいのですから、そういうふ子も、容易にだめだとして仕舞ひませぬ。殊にそういうふ子も、つまり嚴密なピアノ的音律に適しくても、太鼓とか、時には、もつと雑な音律でも、リズムの教育は是非したいし、出来るものです」

「いつか樂隊でしてゐらつしやいましたね」

「あれも、そういうふ子を導いてゆくにいやうですよ。リズムだけは一通りのところまで教育したいですね。それは、ただ音楽ばかりでなく、全體の教養に大きな關係をもちますからね」

「リトミックスですか」

「そこまでは兎に角、リズムを感じ、リズムを解し、リズム的に生活し得ることは、確に教養の一要素ですから」

「あ、ピアノが聞えてゐますね。これから唱歌でせうか。一寸違ひますね」

「あれは、音感教育を試みてゐるのです。絶対音といふので、近來いろ／＼の意味で主張されてゐるのですが、幼児期にどこまで適切か、可能にしても、全體の教育とどう關係するか、今はまだ實驗してゐるところです。これは、研究の上で、またお話したさせう」

「幼稚園でしてゐらつしやることに就て、いろ／＼と、なが／＼有り難うございました。またくわしく教へて頂きます」

## 立ちばなし

### 寒中の竹の子

鍛錬といふとささも殿しいことのやうですが、寒からう／＼で包み過ぎ、護り過ぎて厚着の習慣をつけるのも、少くも程々にしなければなりません。幼稚園などで時々斯ういふ子どもが目につきます。厚い肌着、厚い真綿、厚い毛絲、厚いものを幾枚も／＼厚く重ねて、ぬく／＼とふくらんでゐる子です。あんまり着重りで動くことも出来ないのもあれば、それで動くので、下は汗でじつと蒸れてゐるものもあります。どつちにしても、却つて風をひき易くしてある譯になりません。

昔、支那に、寒中雪を掘つて親の好物の竹の子を取り出した孝子があつたそうですが、これはまた、わが子を寒中の竹の子にする親です。わが子に寒中竹の子を要求する親も親ですが、わが子を季節はずれの竹の子にする親も親ですな。